

# 十一月作品

## 月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

床下に  
森 重 香代子 山口

床下に白蟻退治の男あてことりと音す盃蘭盆近し  
忘れものして来たやうで振返るひとり来て去る墓山の徑  
列なして占ひを待つをとめらの後ろを過ぎてデバ地下へ行く  
くぐまりて足の爪切る姿など見る人はなし夫も世に亡く  
山の陽の湯殿に差して閑かなり八十余歳いまだ暫時あり

熊の目  
狩 野 一 男 東京

あしひきの山また山のふるさとの真夏の闇に光れ熊の目  
表現の自由不自由、歌に抛る幸かうまた不幸おもふ『バベル』で  
全身が痛みて眠り全身が痛みて起きる自分かなしも  
我ただの法学士だがここにあり問題ゆゑに夏をがんばる  
（四回も手術を受けし頭にて（再発防止）へ向かふ苦しさ）

昭和九十九年  
福 士 り か 青 森

迎へ火を焚けばすずしき風のむた馬くる牛くるたましひ乗せて  
どの家も盆の火を焚くそれぞれに無沙汰言ひあふ路地の明るさ  
送り火を見つつだれもがしんとせり線香花火の玉のふるるる  
ファッションにあらす呪まじなひにもあらずガザの少女は脚に名を書く  
八月の証言遠くなりゆきて昭和九十九年の爆暑

宇久島  
大 野 英 子 福岡

海風をすりぬけてゆく下り坂、見開くまなこを海で満たして  
囿囿より解き放たれて風になるうけとめてくれる海を直指して  
こんにちは、こんにちはつて黒牛に声かけながらゆく島の道  
みんみんと遠くで遠慮がちに鳴く宇久島の朝は伸びてちぢんで  
台風のとときの覚悟はいくたびか宇久島に高く積まるる波消し

☆ ————— ☆



影山 一男 千葉

早起きの蟬に起こされしものま意識外意識もどり来る待つ  
老いてなほおのれ貫く生あれよスピンある新潮文庫の矜持  
井戸水で冷やしし西瓜食みし日よ戦禍の記憶覚めざる街に  
お茶の水カルテラタンの夢を呼ぶ角田夏実の巴投げ一本  
蟬声はまだ衰へず名を知らぬ筆者のならぶ歌誌のまぶしさ

水鳥 晴子 兵庫

桑原 正紀 東京

まだ何か匿されてゐることあらむ夕ぞら淡くあかね雲引く  
丑の日の鰻を食べて思ひ出にからめとられて無口となりぬ  
親しみて人間に寄りゆくいきなりに蹴られ段られ飛火野の鹿  
ホスピスへ隣人は去り名の消えし表札の面しろじろとあり  
かわきたる石のおもてを蜥蜴這ふうす茶の背中もろに見せつつ

高野 公彦 千葉

宮里 信輝 神奈川

真桑瓜冷やして食めば酒田にてこれを賞でたる芭蕉思ほゆ  
老いゆくは敗走でなくゆるやかに迷走しつづ涯を探る旅  
退屈な日暮れアナグラムして遊ぶ高野公彦、恋の神来た  
手直しを終へし歌また推敲す（神は細部に宿る）と思ひて  
この人善人ですが頑固だと笑ふがに鳴く暁の山鳩

奥村 晃 作\* 東京

小島 ゆかり 東京

AさんをBさんと違え治療せし眼科医院は忙し過ぎて  
窓口が変わるごと氏名・生年月日告げたり我も慶応病院に来て  
国会が決すべき事案のどれもこれも総理が決める仕組み正すべし  
富裕層と極貧層がくつきりと分かるる社会正さねばならぬ  
本当のリーダーならば富豪から巨富取り立てる税制作る

思ひ出し笑ひののちにあくびして埃にそよぐひるがほになる  
頭とか手足とかまして心とかまとまりがたし猛暑の日々は  
AI化儀式のごとく首に巻くマイナス5度C冷感タオル  
しらたまのうどんに卵、葱、醤油 暑き日くられてあかき月照る  
介護の日あまりに長しふるさとの川原を歩きつづけてわたし

木 畑 紀 子 京 都

とねりこの花のむかうのあをぞらの底へとひびく熊蟬のこゑ  
シイシイはうれしいのシイこんなにも世界はひろい樹液はあまい  
シイシイはいそがしいのシイさあいつけ時間が無いと雌呼びつづく  
シイシイはさびしいのシイむかひあふ樹にぬし仲間地上にまろぶ  
かずしれぬ蟬が脱皮しかずしれぬ蟬のいのちが終はるひと夏

島 田 暉 神奈川

好きですきでたまらなく澄む秋の空トンボは翅をかがやかせ翔ぶ  
自転車をよくよると漕ぐ老い吾が浮き世の坂を遠ざかりゆく  
青き田にひとり立ちつく案山子の瞳金の稲穂のそよぎてあたり  
ウクライナの向日葵は遠けれどミサイル弾の撃ち合ふ真下  
戦記読む瞳はじよじよに重くなり葉はさみてページを閉ぢぬ

大 松 達 知 \* 東 京

ホームラン打たれたことのない顔を風にさらして申し訳ない  
（燃えない）ほくが入れてるものたちはよく燃えたと砂糖のように  
その裏にある筋骨洞思いおりわけ知り顔の真ん中ら辺  
おまえのさ、人生だろ、と言いながら割り込んでゆく滝はもうない  
ゲリラにはRがふたつLがふたつどこ吹く風はここを吹く風

田 宮 朋 子 新 潟

遠花火の音にさそはれ田んぼ道八千歩ほどあるいてしまふ  
日盛りの庭で待ちぬしひあふぎに黒揚羽来てしばしの逢瀬  
窓の外の柿の青葉が小刻みにふるへて雨は本降りとなる  
きのふ聴きしこゑを朝刊に読みなほす長崎市長平和宣言  
クーラーを効かせてハーゲンダッツ食む蟬鳴さしきる終戦記念日

津 金 規 雄 神奈川

双眼鏡の視野いっぱい遠花火身をひろげたり丘の向かうに  
色とりどり弾ける花火をつつくしと見てをり戦を知らざる我ら  
何秒か遅れてとどく爆発音 いくさなき国で見る遠花火  
遠花火見終へし視線をゆうるりと天頂ちかきデネブへ移す  
ペランダで花火見し身を部屋へ戻し読み継ぐ茂吉の「作歌四十年」

小 山 富 紀 子 京 都

ひきどきを忘れてしまひし人ばかり今年の夏は無闇に暑い  
病名を聞きただれどもがまんするあなた自身が口にするまで  
入院の電話聞きつつお見舞ひの品はと思ふわたしの薄情  
入院の荷にそへませと大好きと言ひし歌人の新刊送る  
補聴器をつければジジと湧く音は ああ蟬の声陽射しが痛い

清 水 正 子 神奈川

シャボン玉の中から外をみてる感じ術後のアイカパー透明眼帯  
パリエンヌは素つびんが好き媪われは洗顔禁止で仕方なく素つびん  
白内障手術したけど近眼のままなりいつもの眼鏡をかけて  
オペのため飲まずにゐたり夏の雲がビールの泡のやうに見えても  
若き日にわれの勤めしビール会社、月に一度は佐太郎がきぬ

小 嶋 一 郎 佐 賀

雨降らぬ日のあぢさゐは相応はずと思へど見入る狭庭の隅に  
この十日外出をせずに過ごしゐるコロナ罹患の老々二人  
干し柿を吊るす晩秋のその日まで軒下の竿眼に鎮めある  
かなしくて鳴くにはあらず梅檀の青葉の陰の番の鴨は  
青物を食へ食へと言ふこの医師のことは有難さふりをして聞く

藤野 早苗 福岡

これの世をときに締めたり弛めたり父のくれにしドライバー(小)  
胆管を塞げる何ものかのありてたらちね急変黄疸の出づ  
しやべりたいだけしやべるべし口三つ御託をうべなふつもりはないが  
あとあちの悪さは百も承知にてステイヴン・キング読む夏の夜半  
ぬかるみにみづがねいろの光生る驟雨ののちの八月の庭

風間 博夫 千葉

「水に流す」過去のいざご恨みつらみ水に流せるものところぞ知れ  
「要らず」にはあらず「入らず」の「水入らず」水の入らぬこととは何か  
「水入らず」「水」とは(他人)余所者よそもものを入れず身内の者だけをいふ  
飛び込んで息継ぎをせず。バタ足で二十五メートル泳ぎ切りたり  
息継ぎをせず。バタ足で進むのみ水難事故の救助はできず

小島ゆかり著書二冊

はるかなる虹

第十六歌集  
コスモス叢書第1236篇

短歌研究社

令和6年7月刊 三〇〇〇円(税別)

送料三〇〇円

サイレントニヤー

猫たちの歌物語  
コスモス叢書第1241篇

短歌研究社

令和6年8月刊 一八〇〇円(税別)

送料三〇〇円

連絡先 〒112-0013 東京都文京区音羽1-17-1 四

音羽YKビル 短歌研究社

田中 愛子 埼玉

空き家もおほく呼吸してゐるや窓といふ窓ひらく盆の日  
六人の月命日に経を上ぐ誰も知らないわたしのつとめ  
その名前まことすぎ ちやぶ台の上に載りぬし「味の素」はや  
宅配のをちさんとハグしたいほどうれしい日ありまれまれですが  
おそなつの里のゆふかぜ涼しくてさやさや大きく大き耳欲し

大松達知歌集 令和6年1月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

ばんじろう

コスモス叢書第1233篇

六花書林

連絡先 〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-12-4 一〇  
マリノホームズ1A 六花書林

高野公彦評論集 令和6年3月刊 二八〇〇円(税別)送料三〇〇円

歌の魅力の源泉を汲む

コスモス叢書第1235篇

柘書房

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼1-21-2 一五〇六

斉藤梢歌集 令和6年7月刊 二三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

青葉の闇へ

コスモス叢書第1237篇

柘書房

著者住所 〒982-0831 宮城県仙台市太白区八木山香澄町

二一-一〇一三〇六 薄葉様方

橘 芳 園 新 潟

千光寺出合ひし生徒の二人組高校合格われにもつげぬ  
母の里友の里なる紫野路地にたこやき売の店ありき  
母の里近き社の門映る「鬼平犯科帳」のエンディング見る  
大拙に碁を教へしが自慢とふ自慢の祖父に死なばまみえむ  
京生まれ母の好物ういらうは亡きのち今は妻の好物

水 上 比呂美 東 京

美季ちゃんは坊やのにちやんみたいだな髪をしばつてショートパンツで  
会ふたびにかしこくなりてゆく坊や 婆は何かをこぼしてしまふ  
ぐづる子を五分で寝かしつけますよ、密着度よし揺れ具合よし  
まつがねの待ち受け画面を甥つ子の変顔にせり伯母バカの香葉  
赤子泣く声が聞こえる生活はいいね裏から赤子の泣きこゑ

鈴 木 竹 志 愛 知

「選歌」ではなくて「戦稿」と変換されしばし見つめるパソコン画面  
戦闘は祝祭の日々にも続きあるあへて言葉に出だす少なく  
何ができるといふわけではなくてただ報道が流す死者数を知る  
はるばると諏訪湖火花を見に來たり破裂の音量に彼の地を憶ふ  
美しき火花を眺めゐるこの日この世のことは次第に忘る

原 賀 環 子 東 京

蜘蛛の囀におちる黒衣の女の画また取りだして壁にかけた  
居間にゐて安らぐときと安らげぬ時のありけり壁の画ひとつに  
蜘蛛の囀の画のみに知れる画家の名グザヴィエ・メルリ、グザヴィエ・メルリ  
雨あがりのクモの巢にほうと見とれたしこのころ雨後のクモの巢を見ず  
ちくはぐなままで終はらむクモの巢を好みつつクモの恐怖症われ

水 上 芙 季 神 奈 川

45℃でもわれら「超超猛暑日」と言つて出勤するのだらうか  
蟻地獄のやうにおむつが吸はれゆく子ども用おむつ専用ボックス  
執刀医のごとく厨を出できたり家族四人の桃剥きし母  
夏休みは飯繩山で駆け回り蟬のおしつこ温かかりき  
胃腸炎のわれは子どもの離乳食(9ヶ月用)を一緒に食みぬ

松 尾 祥 子 東 京

むらさきの朝顔一輪咲きにけり七十九年目の終戦日けふ  
六歳の有葵乃植ゑたる朝顔に祈りぬ戦のラツパは吹く  
爆撃機降下して機銃掃射する敵兵の顔見たりと父は  
学生の父の思ひ出にまざまざと風化せぬ浜松大空襲  
抑留をされて戻りし祖父のこと父は語らず父も逝きたり

鈴 木 千 登 世 山 口

をちさんでなくをちちゃんも馴染まない(をいちゃんと呼ぶ温もりの人  
樫の木のとところに似てをいちゃんの膝の隙間は温く深かりき  
眉根濃き南方系のかんはせは変はらず(遺影の)笑みも変はらず  
過去最高気温更新した昼の日射しの圧は疼みに似たり  
七人の身内で送る をいちゃんをあらん限りの花で埋めて

小 島 な お \* 東 京

筆記体の署名をなぞるある夜は白骨として文字を拾つた  
俳優のなみだは白く濁りつつ顎から落ちぬ 雪の長保  
娘には未来があるというひとの言葉の陸地這うように聞く  
玄関にきみが帰った靴の土拭き取るあいだまだ夏のあいだ  
切り貼りできた顔だち片頬を破つてきつと夕顔にする

小田部 雅 子 静岡

芥 藤 梢 宮城

ひたむきな真顔ですこし口あいて声にならないサイレントニャー  
絶対の愛―ゆかりさんあればこそ鳴くたますけのサイレントニャー  
サイレントニャーを鳴きたいときが来む百歳超ゆるころのわれにも  
百歳のをれを鳴かせてくる人あらんやせつないサイレントニャー  
みづからへサイレントニャー鳴きながら目を閉ちて逃げ百歳のわれ

母の悲鳴ひらがなばかりの文に聞きわれの抒情の枯れてゆく夏  
悲鳴ばかり要求ばかりの母の文読むは我のみ、今日は三通  
失つてしまつた心のやはらかさ 雲もどこかで泣くのだらうか  
魚沼産スイカ一玉の夏力 食べては生きて憂鬱を跨ぐ  
もう父はわれの歌集も読めなくて父への一冊手元に残す

うたを味わう―食べ物の歌 ●高野公彦

十一月の味 ― 牡蠣の食べ方―

卓上に寒気あつめて一盞と酢牡蠣置か  
れてある夕まぐれ 春日井 建

寒くなると牡蠣がうまくなる、と言われ  
る。英語でRの付く月、つまり九月  
(September)から四月(April)までが牡蠣  
の旬だそう。牡蠣の身は不定形でヌルヌ  
ルしていて、食感はよくないが、味はなか  
なかい。

食べ方は、フライのほか、鍋、雑炊、炊  
込み御飯などがある。いちばん旨いと言わ  
れるのが、生ままでレモンをかけて食べる方

法である。これは旬の新鮮な牡蠣でなけれ  
ば駄目であろう。むかし昭和四十年代にア  
メリカの人気フォーク歌手ジョン・パエ  
ズが来日したとき、広島で牡蠣を食べて食  
中毒を起こしたという話を聞いたことがあ  
る。生まの牡蠣を見るたびにそのことを思  
い出す、旨いから私は構わず食べる。し  
かし高価で、めつたに食べる機会がない。  
ふだんはフライや鍋で味を楽しんでいる。  
鍋のあとの雑炊もいい。

蠣むきかの手に明りさす冬楓

支考

こんな俳句があるから、牡蠣はすでに江  
戸時代には食べていたことが分かる。しか  
し日本人がいつごろから牡蠣を食べるよう  
になったのか、詳しいことは知らない。  
ところで、「夜の牡蠣は見逃すな」とい  
う話がある。これは、夕食に牡蠣が出たら  
見逃さずに食べよ、なぜならば牡蠣にはセ  
ックス・ミネラルといわれる亜鉛がたつぷ  
り含まれているから、という意味だそうだ  
(新人物往来社『食の百科事典』)。本当だ  
らうか。

掲出の歌は、酢を垂らした生ま牡蠣を詠  
んでいる。「一盞」とはこの場合、ワイン  
であろう。あるじの着席を待つ晚餐の前の  
静けさが伝わってくる歌だ。歌集『青葙』  
より。